

社会言語科学会ニューズレター 第 20 号 (2005 年 9 月 29 日発行)

ご利用になるには, Acrobat Reader (無料) が必要です.

<http://www.adobe.co.jp/products/acrobat/readstep2.html>

《目次》

[01] 巻頭言

[02] 研究最前線

[03] 第 16 回大会のお知らせ

[04] 博士論文情報

[01] 巻頭言

「民族性」という言葉はブラックホールのようなものだ

生越直樹 (東京大学大学院総合文化研究科)

私は近く刊行される予定の『社会言語科学』の特集号, 「日本語と韓国語・朝鮮語をめぐって」のエディターをしている。特集にはたくさんの投稿があり, 社会言語科学の観点から韓国語・朝鮮語を扱う研究者が増えていることを実感した。しかし, その投稿論文を読んだり, 他の学会等に投稿された論文を読んだりする中で, 一つ気になっていることがある。ここでは, そのことについて少し述べてみたい。

最近では, 日本語と韓国語・朝鮮語の母語話者の言語行動や談話を分析して, 両者の異同を明らかにしようとする研究が多くなされるようになった。それらの論文の中には, 調査や資料から両者に何らかの相違点が見られたとき, その原因を「民族性」という言葉を伴うステレオタイプの日本人論や韓国人論によって説明しようとする場合がある。たとえば, 韓国人は積極的に自分の意見を言う, 年上の人を敬う, などのことは, 韓国人を話題にするときよく言われることである。しかし, これらのことはしっかりした研究によって明らかになったこととは言えない。しばしば言われることではあるが, 実際にそうなのか, そうであったとしても状況によって変わる可能性はないのか, など正確なことはわかっていないというべきだろう。そのような確かな根拠のない韓国人論や日本人論を持ち出して, 研究の結果を説明しようとするのは, 極めて危険なことである。社会言語科学はそれぞれの社会と密接な現象を扱う。それだけに, 得られた結果を社会的な事柄と結びつけて説明したくなる気持ちはよくわかる。しかしもう一度考えてほしいのである。我々は世間で言われる韓国人論や日本人論の正しさを証明するために研究をしているのか。否である。むしろ, そのようなステレオタイプの論を疑ってみるところから, 新たな研究が生まれるのである。民族性を示すという事象も, 実は社会の変化に伴って生まれた一時的な事象に過ぎないかもしれない。せっかく得られた結果を簡単に民族性と結びつけてしまえば, 新たなものは何も生まれない。結果を民族性と結びつけた瞬間, 思考は停止してしまうのである。これは韓国人, あるいは日本人の民族性だ, と言った瞬間に, それ以上の解明は行われなくなる。結論は出たのである。それ以上追求する必要はない。「民族性」という言葉は極めて便利なもので, 何でもそう言えば, 何か結論を言っているような感じになる。だから, 私は「民族性」という言葉は, ブラックホールのようなものだと思っている。そ

ここに入ったら、もう何も出てこない。「民族性」という言葉は妖しい魅力を持っており、何でもそこに引き込もうとする。

我々は、研究で得られた成果が何を意味するものなのか、慎重に判断しなければならない。私は「民族性」の存在を否定するわけではないが、そのことを論ずるためには、さらに多くのことを解明しなければならないだろう。少しずつ、確実に研究を進めていきたいものである。

[02] 研究最前線

ジェスチャー研究 - ことばと身体行動の連鎖分析 -

細馬宏通 (滋賀県立大学人間文化学部 hhosoma@shc.usp.ac.jp)

わたしの関心は、さまざまな学問領域の境界にあって、ずばり特定分野を言い当てることできない。あえていちばん近いものを挙げると、「ジェスチャー研究」ということになるが、関心はジェスチャーのみではなく、会話分析や言語研究にも広がっている。

もともと動物行動学出身のわたしがヒトの会話の研究に足を踏み入れたのは、行動のシーケンス（連鎖）に対する興味からだった。ヒト以外の動物のコミュニケーションを扱うときには、その行動の形態が持っている意味もさることながら、そのタイミングが重要になる。適切な間とタイミングで行動が発せられると、それは相手の次なる行動を呼び、さらにこちらの行動が呼び覚まされる。動物行動学には、こうした行動の連鎖を解析する手法が数多くある。

わたしが最初にやった仕事は、ヒトの会話における発話間のタイミングを解析するというものだった。動物行動学におけるシーケンス解析と時系列分析のテクニックを、ヒトどうしで行われる会話の分析に応用しようとしたのである。

最初は、ほかの動物を見るようにヒトの会話を聞いていたので、発語自体よりも、タイミングやポーズ、そして重複の長さにもつばら興味があった。しかし、やがて、Sacks, Schegloff & Jefferson の会話の断片を詳細に分析していく手つきや、C. Goodwin の生き生きとした日常の切り取り方を学ぶうちに、複数の声の織りなすことばの微細な構造にも興味をわくようになった。動物行動学のような計測中心の世界と会話分析の世界とは、いっけんすると結びつきにくいようだけれど、行動のタイミングとシーケンスに注目するという点では、意外に近いこともわかってきた。ちなみにいま Schegloff が準備している会話分析の教科書のタイトルは、ずばり「Sequence Analysis」である。

身体の動きの問題を入れると、会話コミュニケーションの問題は一気に複雑になる。言語コミュニケーション研究では、声という時系列のみに注目するが、そこに両手の動きや頭、視線の動き、あるいは体全体の動きなどが加わって、たくさんの時系列が同時並行して流れるさまを相手にすることになる。

といっても、単にでたらめなできごとがてんでばらばらに起こっているというわけではない。人と人とのコミュニケーションは驚くほど精緻にコントロールされている。0.1s 以下の世界で起こる丁々発止のことばと身体のやりとりを子細に分析していくと、これまでことばとことばとの関係だと思われていたことが、じつはことばと身体とが関わっていることに気づかされることが多い。

わたしがわりと気に入っているのは、まず、あえて映像を見ずに音声のみのスクリプトを作ってから、あとで映像を見るというやり方だ。

いきなりマルチモーダルに進行するコミュニケーションのすべてを見ようとする、いったいどこに注目してよいかわからなくなってしまう。むしろ、最初は音声のみに注目してあとからジェスチャーを見たほうが、いかにジェスチャーがコミュニケーションにおい

で決定的な役割を担っているかがよくわかる。昔からプログラミングは好きなので、分析には、自作の GeScript (<http://www.12kai.com/scr/gescript/gescript-j.html>) というソフトをくんで解析を進めている。

2002 年には国際ジェスチャー学会が発足、2005 年には第二回が行われた。Kendon, McNeill といった大御所をはじめ、手話、乳幼児研究、ロボティクス、脳科学などさまざまなジャンルの研究者が集うホットな場となっている。いまや言語研究は、ジェスチャー研究を通じて、ヒトの身体と言語とがいかに時間の流れの中で意味を生成していくのか、という大きなテーマに向かって開かれつつある。

[03] 第 16 回大会のお知らせ

社会言語科学会の第 16 回大会(龍谷大学)は、以下の予定で行われます。

【日時】 2005 年 10 月 1 日 (土), 2 日 (日)

【場所】 龍谷大学

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町 67

<http://www.ryukoku.ac.jp/web/map/fukakusa.html>

交通：地下鉄「京都」駅から竹田方面へ「くいな橋」駅下車、東へ徒歩約 7 分

JR「京都」駅から奈良方面へ「稲荷」駅下車。南西へ徒歩約 8 分

京阪「四条」駅から淀屋橋方面へ「深草」駅下車。西へ徒歩約 3 分

プログラムの詳細は、大会委員会のホームページをご覧ください。

<http://www.wdc-jp.com/jass/16/>

[04] 博士論文情報

(2005 年 2 月 1 日～2005 年 9 月 26 日受付分)

A Synchronic and Diachronic Study on Sex Exclusive Differences in the Modern Japanese Language (現代日本語の排他的性差に関する共時的、通時的考察)

渋谷倫子 rinko@apu.ac.jp

University of California at Los Angeles (UCLA), East Asian Languages and Cultures
Ph.D. 2004 年 3 月

「日本語には明瞭な性差がある」という言説が果たして妥当かどうかを共時的データ分析、および通時的検証で考察した。日本語の性差とされるものは実態に乏しく、また明治政府主導で制定された「標準語」とも直接の関係はない。これは江戸期から明治時代の社会的変換期における、新しい「女性性」のモデルの模索から生まれたことを論じる。

『小笠原諸島における日本語の方言接触 - 方言形成と方言意識 - 』

阿部 新 xin@pos.to

東京外国語大学大学院地域文化研究科 博士(学術) 2005 年 3 月

複雑な歴史を持つ小笠原諸島において、これまでに二度起こった方言接触による方言形成について方言接触論の観点からまとめ、現在の方言接触状況下での方言意識や社会ネットワークをアンケート結果から検討し、今後の方言形成の行方を考察した。

『国字の位相と展開』

笹原 宏之 sasa@waseda.jp

早稲田大学大学院文学研究科 博士(文学) 2005年5月

本稿は、日本製漢字のたぐいを指す「国字」について、従来の概念規定に見直しを加えるとともに類似する概念を含めて体系化を行い、また文字がその使用者層によって「一般的な文字」「地域文字」「位相文字」「個人文字」と分類できることを示し、それらに個々の国字を照応させることを通じて、国字の変遷の歴史が動態として捉えうることを実証した。

『日韓の断わりの言語行動の対照研究：ポライトネスの観点から』

元 智恩 kjahello@excite.co.jp

筑波大学大学院文芸・言語研究科 博士(言語学) 2005年3月

本論文は、日本と韓国の断わりの言語行動をポライトネスの観点から、比較分析しようとしたものである。Brown & Levinson(1987)のポライトネス理論を捉えなおし、日韓の言語行動の分析に適切な「ポライトネスの軸」というものを提案した。これをもとに日韓の大学生を対象とした調査を実施し、その結果をノンパラメトリックな統計手法により精密に検証した。その上で日韓両言語におけるポライトな断わりの言語行動を示した。

発行：社会言語科学会事務局

E-mail: jass-post@bunken.co.jp

URL: <http://www.jass.ne.jp>